



今月のことば

Words of the Month

みちすがら

日本弁理士会副会長

小西 富雅

令和元年度の日本弁理士会副会長を務めさせていただきます小西富雅です。

実質的に昨年秋の予算編成から始まりました正副会長の仕事を通じまして、責任の重さをヒシヒシと感じています。私自身の行動、所作、言動が、僅かながらにしても、会員の皆様に直接的に若しくは間接的に影響してしまっていることを恐ろしくも感じています。

日本弁理士会の役員として、私はどのように考え、言葉にし、行動にしたらよいのでしょうか？

この問いの答えは、今のところ、子供のころにお寺で聞いた、「良いことを行いなさい。悪いことはしなさんな。」です。

大人になってから知った言葉では「諸悪莫作、衆善奉行（しょあくまくさ、しゅぜんぶぎょう）」（諸々の悪をなさず、多くの善（良いこと）を行い奉りなさい）です。この後には「自浄其意、是諸佛教（じじょうごい、ぜしよぶつきょう）」（このようにして、自らの意（心）を浄めていくこと、これが諸佛の教である）が続きます。

七佛通誠偈（しちぶつつうかいげ）といい、お釈迦様も含めてこの世に降臨された7名の佛が共通して説かれた教えということです。

「良いこと、悪いこと」は、子供の頃の私にとって比較的簡単でした。両親や先生の言うことをよく聞いて従うことが「良いこと」で、言い返したり反発したりすることは「悪いこと」でした。高度成長期が始まり欧米に必死でキャッチアップしていた時代（昭和30年代）がそのように感じさせたのでしょうか。

ところが、個性が求められる令和の御代の子供にとって、両親や先生の言うことに唯々諾々と従うことが「良いこと」と評価されるのでしょうか？

翻って、私が担当する日本弁理士会の事業の一つに地域知財の活性化があります。例えば特定の

企業や団体の支援が上手くいって、そこのヒトには喜んでもらえたとしても、その企業や団体の競争相手からみたら迷惑なことかもしれません。もしも、ある会員がその競争相手の顧問でしたら、オイオイとなってしまいます。

「良いこと」また「悪いこと」がわからなくなってしまうです。苦楽表裏、愛憎一如です。

七佛通誠偈で説かれた「善（良いこと）」は、お釈迦様をはじめとした諸佛が考える「良いこと」であって、私のような普通の人間（凡夫）には、到底わからないことかもしれません。わからないのであれば仕方がない。「目の前の人を幸せにしよう。自分の良心に恥じないようにしよう」というのが、以前の私の考えでした。

これでよいのかしら？ と漠然と考えていました。おそらく、諸佛からは100点満点はいただけないでしょう。

ところで、今年私は還暦を迎えました。私の地元の愛知県知多地方では、村のしきたりで、還暦を迎えますと、同年みなで伊勢参りを行います。私も、同年の友達と、つい先ごろ外宮さん、内宮さんに参拝してまいりました。内宮さんへお参りする際、五十鈴川で御手洗し、参道を歩いていますと、清々しさだけではない、なんとも言えない凛とした、力強い空気を感じました。そして、自分の心が浄化されている気がしました。別の言い方をすると、パワースポットを感じました。

何かを鼓舞するような看板や音楽があるわけでもありません。森の中の砂利道を人の列に従って歩いているだけです。遷宮間もない内宮の祠もシンプルそのものです。

「美しい」を改めて感じました。

七佛通誠偈に説かれる「諸悪莫作、衆善奉行」が「自浄其意」（心の浄化）するためのものであれば、伊勢神宮のような「美しさ」はその必要条件かもしれません。換言すれば、「諸悪莫作、衆

善奉行」が「自浄其意」（心の浄化）の要件としたら、「美しさ」はその要件の一面を表しているのではないかと。要は、「諸悪莫作，衆善奉行」を上位概念としたら、「美しさ」は実施の形態にあたるのでは……，ここまできて，弁理士病にかかっている自分を感じました。

いずれにしても、「良いこと」は、きっと美しさを伴うのでしょう。伊勢神宮を基準にすれば、シンプルイズベスト、でしょうか。

話は変わりますが、伊勢神宮では、外国人観光客の比率が極端に少ないように感じました。村の伝統に従ってお伊勢参りをした私にとって、やはり日本の伝統にも美しさを感じました。余談になりますが、初老（42歳）のときは、前厄でお多賀さん（滋賀）に参詣し、本厄で伊勢神宮に参詣します。天照大御神のご両親（イザナキ、イザナミの大神）がお多賀さんに祭られているからのようです。

天照大御神に授かろうということですので、初老祝いのおときも還暦祝いのおときも、お参り後の宴会は外せません。天照大御神様にお出ましにいただくには、天岩戸を開かなければならないからです。子供時代を過ごした友人と酒を酌み交わすことは本当に楽しいものでした。神様にも喜んで頂けたのでしょうか。

名古屋の老舗の百貨店である松坂屋の当主 伊藤次郎左衛門さんは、代々、揚輝荘にて、正月の書初めに「諸悪莫作，衆善奉行」と書かれていた

そうです。諸仏の教えが事業にも関連することを実感されていたのでしょうか。書初めの、あとの一振りは、「火の用心」ということで、歴史を感じます。

皆様も、クライアントの会社を訪問して、その門や玄関を入ったときに何かを感じたことはありませんか？ いわゆる空気感というヤツです。私が良い会社だなと感じるのは、決まって整理整頓、清潔感のある受付であったり会議室であったりします。

この原稿を書いている私の事務室はといえば、大変マズイ状態です。さっそく整理整頓，掃除をしなくては……。

本稿がパテント誌に掲載されるころには弁理士制度 120 周年の記念式典が開催され、そこには皇室の方をお招きできるのではということです。120 年続いた日本弁理士会の伝統にはやはり守るべきことも多くあるように思います。私たちが当たり前で何も感じていないなかにも、諸先輩方が作り上げてきた知恵が織り込まれているのではないのでしょうか。

私は、会務をさせていただくに当たり、大変抽象的ではありますが、その結果が美しいもの、即ち、シンプルで日本の伝統に沿っているものに少しでも近づけたいと考えています。皆様のご協力、また、ご鞭撻のほどをよろしくお願いいたします。